

岩屋山 観音たより

発行所：和歌山県

海草郡下津町橋本一〇六五

福勝寺内

電話 (073) 4941031
編集人：本多碩峯

激動の二十一世紀を生きる(三)

私達はこれで良いのだろうか！

今世紀最後の五十五回忌

八月六日(広島・九日(長崎)、二十世紀最後の「原爆の日」・そして終戦記念日を迎えました。

あの人も

この人もと

雲を見る 原爆忌

この詩は元京都府知事蜷川虎三先生が詠われ、陶器の茶器刻まれたものです。



あの人も この人もと
雲を見る 原爆忌
虎三
(ご家族から贈与された我が家の宝)

八月六日から八月十五日に至る十日間は、独特の雰囲気を持った時間である。その期間、我が国では、「鎮魂」、「祈り」、あるいは「回想」の国民の思いの表情を示しながら、多くのことが至るところで語られる。遺族や市民をはじめ森義朗首相をはじめとして各国の要人ら多数参列。終戦記念日には天皇・皇后陛下

修行僧・同行二人 本多碩峯

ご参列の上、厳かに戦没者の供養祭が執り行われました。

終戦時、郷里の疎開先で小学三年生の小生も祖母と一緒にラジオから流れる昭和天皇の玉音放送を聞き入った状況を思い出しました。わが国においても有史以来人身の権力闘争があり、また、領土・資源等の侵略を因とする民族、国家間の争いが平安を願う一市民の生命をも奪ってしまふ。

突然にやって来る自然災害、交通事故、あるいは病に倒れる悲しみの中に、悲しみを乗り越え、人間としての絆の大切さを学び取ってゆく相(すがた)もある。

日本伝統仏教が過去の戦いに人間の平安を語らずして「戦地布教」を名目に国家に参加したそのことが改めて問われなければならない。

人類の幸福(文化遺産の存続を含む)・平安のために宗教が存在すること忘れてはならない。

蜷川虎三の功績

ベンチャー企業支援政策

わが国の敗戦後産業育成の中で中小企業の発展を期し、京都大学教授から時の首相・片山哲(和歌山出身)時に

真理の花たば



岩にや叩かれ、荒瀬にや揉まれ、
辛苦つくしてのぼる鯉

故畠田禅峰書

前第六番安楽寺長老・大僧正・勲五等瑞宝章
初代中小企業庁長官・蜷川虎三氏の功績、VECの設立(研究開発型企業育成)、創業者支援を技術的にはインキュベーターの思想、資金面ではベンチャーキャピタル等の思想の確立等、今日のベンチャー企業の繁栄の原点が昭和二十年代にある事。

文化面での功績偉大である蜷川虎三氏が京都府知事の在職(一九五〇―一九七八)期間中に数々の案件の中で日本の映画への発展と保存に尽力を尽くされ、京都映画界の伝説の偉人、無声映画を含め千本以上主演をされた尾上松之助を称え京都・鴨川公園の尾上松之助胸像。映画文化と社会への貢献をたたえて昭和四十一年、故蜷川虎三・京都府知事によって建立された。地方自治「住民が主人公の理念で自治体に取り組まれた。真言宗 京都智積院(弘法大師空海が創設された大学・現智積院大学)に眠る。人の生命・先祖、生き通しの文化の命を大切にしている。今日の世界に誇る京都仏教文化を育んでいる。自然法爾果して近代化の美名の中に(次頁へ)

明日の装を提案します！

寝装・和装・洋装・総合繊維卸

株式会社 マスメン

代表取締役 増田都司夫

本社

〒640-8376 和歌山市新中通2丁目8

TEL (073)424-4466(代表) FAX (073)436-6508

豊かなまちづくりに参加します！

株式会社 田淵建築設計事務所

無限供給の原理に基づく創造！！

代表取締役 木田耕藏

本社

〒640-8287 和歌山市築港4丁目2-1

TEL(073)431-0261 FAX(073)431-3898

生き通しの生命(いのち)が葬られていないだろうか。

明治維新で日本の開国の美名の下に日本文化を破壊する施策に真つ向から反対する二人の偉人を思い出す。

一人は岡倉天心(一八六二-一九一三)氏は東洋の考古学並びに芸術について当時現存する第一級の権威者として有名な人であり、

一八八六年東大卒業若二十四歳で欧米の芸術の歴史並びに芸術運動を研究する目的で日本政府の一員として遊学、帰朝後、日本政府は氏の功勞と所信とを高く評価して、氏を東京の新設美術学校の校長に任命する。しかし、政治上

の変化は、いわゆるヨーロッパ主義の新たな波をこの学校の上にももたらすことになり、一八九七年にヨーロッパ的方法をますます盛んにすべきであるとの強い主張がなされました。ここにおいて岡倉氏は職を辞し自身の信念を貫いた。

横山大観らと日本美術院を創設。渡米中の一九〇四年、ボストン美術館のスタッフに就任。その後、「アジアはひとつ」の哲学のもとに、日本美術だけではなく、中国・朝鮮の美術品の充実に図った。一九一〇年には、中国日本美術部(現アジア美術部)長に就任した。

もう一人南方熊楠(一八六七-一九四二)和歌山県が生んだ世界的な博物学者南方熊楠。その頭脳と行動力は、近代日本の黎明期である明治時代、そして、大正、昭和の初期の時代にあつて、幅の広い国際的な業績の数かずを残し、柳田国男をして「日本人の可能性の極限」と評さ

せた。南方熊楠は海外で十五年におよぶ独自の研究生活を送り、一九〇〇年(明治三十二)に帰国して、以後郷土和歌山県に住み、とくに一九〇四年からは田辺に定住して、亡くなる一九四一年(昭和十六)まで三十七年間の後半生をこの地で過ごした。その間、粘菌や民俗の研究に没頭し、自然保護などにも尽力し、偉大な学者とあがめられ、また、たいへんな奇人とみられていた反面、南方先生とか「南方さん」と呼ばれて、町の人々に親しまれた。

した。

氏に思想的には、十二歳年上の僧、友人として密教の師と仰ぐ高野山真言宗の土宣法竜とは互いに勉強しあえる間柄で、学問の哲学を回帰、とでも言つのか、学問は一つのことを貫いても全体が見えてこず、多くの事を学ぶことに依つてようやく見えてくるものがあるという信念が物語る。

廃仏毀釈後高野山奥の院を弘法(ひろのり)神社に変更を迫る官に猛然と反対する土宣法竜を応援、神社合併の施策に猛然と反対活動をされた。

衣食住 (二)

「食」

仏教では肉体と精神即ち「身心一如」といい、その身体を養つ食を大切にします。大宇宙の中で「地・水・火・風・空」

の五大要素、即ち大地・水・太陽・風・空気が宿っているのはこの地球だけです。この五大要素によって生きとし生けるモノ一切が育んでいます。 私たち人間を含む生きとし生けるモノ一切の「食」は、と問われ

ますとそれは五大要素であると答えます。この生きとし生けるモノ一切の中で「識

(心)」を以ているのが唯一、人間なのです。

この要素を六大要素といえます。

人間の「食」の原点がこんなところにあります。

植物と動物

私たち人間の食料には一般に植物と動物が御座います。ところで植物は無限に近くあります。動物は獲れば減っていくと考えます。動物食は有害であるということも一概には言えないと思います。

食物の字義はタベルモノであり、人を良くするモノであります。誰でも空腹を感じると何か食べられるものを口にしたくなる。このタペラレルモノが食物でもある。この食物を要求するのは本能によるもので、本能とは動物が生きて行くに必要な能力で、大自然は動物を育み、創生し、それらを生かして行けるように設計されています。それが本能と呼ばれる摩訶不思議な能力で、理屈なしにその目的を達成するようにしています。

そこで、動物の食物ですが、唯食べられるものといいますが、実際は、そのものには動物が生きて行くのに必須で特殊な物質を包含しているものであるという条件がついてきます。すなわち、食べられるものなら何でもいいと云いきることは出来ないの

であり、一般動物の食べていいものは、この条件に叶っている天然物そのままなのです。

このようにいいますと、食物というものは面倒なもののように聞かれますが、動物の食べているものは実際には簡単に面倒なものではない。が、私たち人間は、そのような簡単なものでなく、至極面倒なものな

のであります。それは人間だけに見られる文化的生活によるもので、人間だけに、食物以外に食品なるものがある。

そこで、われわれの生活の保証、即ち人

幸せライフのお手伝い!!

総合建設業

酒井技建

株式会社

代表取締役 酒井武義

〒640-0416

和歌山県那賀郡貴志川町長山277-68

TEL(0736)64-6776 FAX(0736)64-8908



皆さんのスーパーみち屋

株式会社

代表取締役 道畑 勇

本 部 和歌山市岩橋7 2 9 番地の6

TEL (073) 473-4197

松 島 店 和歌山市加納2 4 6 番地の1

TEL (073) 474 - 3500

貴志川店 那賀郡貴志川町大字北山5 1 7 番地

TEL (0736) 64- 7020

間の「生きて行く」という最大の条件に、三つが考えられます。

その第一は生態の維持——生体を生存させるに役立つ物質。

第二にその生体のもつ生命を継続させるエネルギーを供給してくれる物質。

第三に以上の物質を生体内で充分利用し得るようになる物質。

とつとつと二種の働きをする物質が必要なのです。これらの働きをする物質を栄養物質といえます。

私たちの食物には、生きて行くに必要な物質(質)を包含していなければならないのであります。生きていくということは、無生物界にはなく、生物界に限定されていることです。人間が生きて行く前に、生物が生きていなければならないことです。それらの物質が私たちが住んでいるこの地球上の何処でつくられているのかということでありはしないでしょうか。

その答えは至極簡単、それらのすべては、燦爛と降り注ぐ白日の下、緑色に輝いている植物の葉の細胞内において水、炭酸ガス、窒素、燐、硫黄等の無機化合物からいとも不思議に迅速に合成されているのだこの合成された物質には、いずれも太陽からこの地球に降り注ぐエネルギーが包含されていて、生物の生活のエネルギーの供給源をなすのです。

太陽は毎日東から昇り、西に沈み、昼はわれわれ地上のすべての物質を照らし且つ暖を与えてくれるばかりか生活のエネルギーをも与えてくれる、太陽なしには生物は生息し得ないのであります。

人類の食生活

食という文字を「人を良くする」と書きますが、一般動物が本能的な生活をしている

のに、唯いつ、人類のみは、そうではない。文化とは人類のみ見られるもので、そのことは本来あるべき自然(じねん・人間も宇宙に実存する生きとし生けるモノの一員とする仏教的考え)から離れ、本来の自然を變更し、人間から見る自然(ネイチャー・西洋的考え)に至ませた。

人類の食生活も、その基本は本能にあります。この本能は意思によつて欲情となり、食欲として現出し暴威を振るうのです。

欲望は精神的現象で、食欲は食の本能そのものでなく、本能を助けるために発生したのですが、人類のように大脳皮質の発達した動物においては、欲情の勢力は絶対性を持ち、本能を従属するようになり、どうかすれば、欲情生活は大自然の掟(おきて)に悖(もと)ることとなつて、生命現象を危険の淵に導く。

禪宗では精進料理、密教では自然(じねん)への感謝の料理を通しての生活

食生活の享楽(きょうらく)

私たちの人生は享楽を伴っています。享楽とは人生を楽しむことです。動物界にあつても独り人類にのみ見出されるものであつて、人生の基礎、生命を保障する食生活においても享楽は、その大部を占めているように考えられる欲情である。人類の食物の定義は、栄養物質の全てを包含していて、その栄養を保障するものであるばかりでなく、必ずその享楽面を満足させてくれるものでなければならぬものとされている。

「こんなものなど食えるか」とは「ここから出る言葉である。このようにわれわれの食へものは一般動物のように簡単なものでなく、

必ず諸種の食品を材料として作られ、且つこれらを享楽し得る工夫された調理がされなくてはいけない。

一般の動物には食品なるものはない。人類の生活には食品なるものを考えなくてはならない。

食物と生命体の関係

植物は、自己の生活に必要な有機物質を無機物から合成するばかりでなく、同時に動物の栄養を保障する物質を作つてくれる。

これは生物として動植物共に生体を構成する基本物質は同じである、と聞く。そこで動物には右記のような無機質から有機質を合成する能力を与えられていないが、前述の原理によつて動物は植物体から、その基本物質を消化によつて作り出し、植物さえあれば動物の生活は可能だそうである。

享楽：快楽を味う。

ここで、動物生育のために本来の方法は植物食であるといえるのです。しかし、動物の中にはこの植物体を動物体を媒介として摂取する、いわゆる動物食の動物がある。この両者を兼ねそえた混食、あるいは雑食動物も存在する。

その食物の種類によつて、植物食をする動物、動物食をする動物があり、前者を肉食動物、果食動物、後者を肉食動物といひ、両者併せる持つものを雑食あるいは混食動物といふ。

モノの本によると動物は、その食物の種類によつてその肉體とその精神上に相当の影響を与えられるものだそうです。

植物食をする動物は、消化器系は発達充実し、頭部に比し腹部が腹部発達消化器を納める)して大きくなっているの

三角形の形をしている。これは、植物食の消化には、その組織をなす細胞を包むセルロースの膜は直接消化することが出来ないの、咀嚼(じよく)によつて細胞を損傷させるか、さらにそれを溶解させるため細菌の援助を必要とするため、反芻(はんすう)し、盲腸などあり、さらに小腸などがある。

しかし、食物は移動することのない植物であるからそれを食する動物の姿は餌をさがすための気骨の折れることがないので、緑草を食べる獣類の姿は至極平和で楽しく見られる。性質も気長で且つ温厚である。それに反し動物食を食する動物の行動は精悍(せいこん)そのものである。体型は逆三角形で、頭胸部に比し腹部は狭くへっこみ、頭が入るところには抜け通

反芻：牛などが、一度のみこんだ食物を胃から再び口中に戻してかむこと。

咀嚼：食物をかみ砕くこと。咀嚼：食物が良好であるため、咀嚼することもなく丸呑みしても何ら問題なく短時間で消化されるそうです。

しかし、動物食を食べる動物はその食物の動物を捕獲するのに相当の努力ばかりか常に流血を伴い獐(じやう)猛(もう)どうも(う)である。混食動物はこの両者の特徴を併せ備えたものといえましよう。われわれ人間はこれに属するもので、消化器管も両者の中間にあることは、食生活上または食物について特に注意すべき点です。

人類の肉食と動物食の違い

動物の動物食を例にとつて見ると、肉食獣といつても、その食物は肉だけを食するのでない。猫がネズミを捕って食するのを見てわかるように、先ず腹部を食い破り、内臓を喰つ、血をすすり、そのあとで

肉を更に骨までかじるのであるという。これを肉食獣と呼ぶのは、全くの外れの呼び名で、犬が肉食獣であるからと牛肉ばかり与えていたところ、何時までも大きく成長しないばかりか、脚腰も立たぬ哀れな子犬として死なせたという話があるそうです。即ち肉には子犬を健全に育てるために必要な全てが含まれていないからです。

肉好き人間さんも肉だけに十分な栄養が含まれていないことを知ることです。又、植物性食品として穀類、豆類、芋類、果樹類、それらは皆植物体の栄養素として特殊な部分をなすもので、食品はこの食品をとっても単独で栄養的に欠落し、普遍的でないであります。

従って私たち人間の食物は栄養的に享乐的に料理に工夫が必要となる、これを再認識する事が非常に大切なことであります。

美食と粗食

人類の歴史で私たちの先人が残された文化を通して知り得ることは美術・建築・工芸・陶芸・食品、各文化において現在の技術を以つてしても先人に劣りはしないだろうか。

足利時代に、わが日本料理道が非常に発達した。鳥では雉(きじ)、魚では鯉(こい)などを料理の絶品と言われ、野菜類では粗物(そぶつ)と唱えられたことが書物に残されているようです。戦後に美食といわれるのは、ぎんめし、といわれましたが今日でも玄米より白米が美味しいことには変わりありません。ぎんめしの白米飯に、美味な肉類を食する食事。口当たりがよく、大変美味しいが、栄養学的に見ますと酸性食品である上に大変栄養的に欠落しているであります。これに反して、粗物といわれる野菜を主

とする食物には、肉類にあるような優秀なたんぱく質こそ含まれていないかもしれないがある程度たんぱく質もあり前に述べた美食に不足している無機質やビタミンを豊富に含有しています。食物として優秀さがございませぬ。動物食で、内臓を食べ、骨を噛(かじる)と同様な価値があるのであります。

食物の献立はこのような点からも嗜好の面からも難しい問題があります。広大無辺な大宇宙で五大要素が唯一私たちの地球だけが神より供与され、人間だけが本能以外に神より工夫の智慧を供与されていることを認知し、平和なシンボルを中心としての私たち人類の食品一切が生きてしいけるモノであります。私たちは殺生なしに食する事が出来ませぬ。天地に許し難い行為をさけ平和な感謝の生活を実践しよう。

東寺の「食堂」

北大門を入ると、すぐ「食堂」がある。食堂と書いてジキドウと読み、本来は僧侶が集まって一緒に食事をとったところという説がある。しかしその真意は定かでない。東寺の僧侶は、このように食堂を解釈する。

僧の食事つてもものは、仏法を食べることなんやね。ご飯を食べることは違つてんですよ。あそこに、鍋や釜がありまか食事をするとつと、すぐ、ごはんを食べると想像するけど、僧の食事は仏法なんですよ。千手観音像の前で僧たちが一緒に食事をとるなんて、僕には想像つかんことやけどね。僧たちがね、仏さんの前で食べるんじやろうか。仏像祀つとる前で、仏の前で僧がすることは、読経する事でしょう。千手観音を本尊として聖僧文殊を主尊として、それが僧の身を養い

命を保つことなんや。この身を養い、命を保つという解釈が、食事にたとえられてると違つかないかな。

命を養い、身を保つものを食(ジキ)というわけでしょう。その食に触れることによつて命を養い、身を保っているんですよ。こはんだって食べることも人間人間でできないですよ。口ちん中入れて、体の中をすぎているだけだね。触れてただけだね。それを我がものにはできませんか。その食のご縁によつて命を養い、身を保っているわけやから。僕はそつとしか、よう解釈せんけどね。食堂は一九三〇年(昭和五年)に火災にあい、現在の建物は焼け残った木材を利用して再建されたものである。その火災で、「千手観音像」は大破し、三メートルを超える日本最大の「四天王像」四体は焼けこげてしまった。千手観音像、四天王像、聖僧文殊像は、ともに八〇〇年代に作られたものといわれ、千手観音像は修復され宝物館に安置されている。炭化が激しい四天王像四体は、長いこと金堂の片隅人々の目に触れることなく、ひっそりとたたずんでいた。

しかし、創建二二〇〇年を迎える節目にと、一九九四年(平成六年)から特殊な樹脂により固める作業が続けられている。

聖僧文殊像は、食堂が焼失する以前に移されていたため焼失を免れ、現在はやはり宝物館に安置されている。この聖僧文殊像は、「三人よれば文殊の知恵」といわれるように知恵の仏として有名であり、一般に菩薩の形をしているが老僧の姿をしているため聖僧文殊像といわれている。

そもそも大乗仏教の寺の食堂には、主尊として聖僧文殊像が安置されている場合が多いといわれる。「東寺文庫」弘法さんの玉手箱より



有限会社 **ミヤタケ**

代表取締役 **宮下隆博**

〒640-8329
和歌山市田中町4-119
TEL(073)422-2327 FAX(073)436-5598



人に優しい音声発生装置!

有限会社 **日本メディテックス**

代表取締役 **山口昭昌**

〒641-0054
和歌山市塩屋5丁目5番43号
TEL(073)446-2009 FAX(073)446-3696

日本の食と思想

わが国の食物について古文書、日本書紀に雄略天皇(四七八)の時天照大神のお告げがあつて、丹波の真名井からお遷した。祭神は豊受大神(皇大神宮から約四キロほどの地にある)。はじめて稲、麦、豆等の種子を天照大神に献上し、わが国民の食物のもとをおつくりになった。と書かれています。皇大神宮な内宮、豊受大神は外宮と称され、両宮をあわせて神宮とよぶ。

貝原益軒に学ぶ

貝原益軒は八十四歳の冬、四十五年連れ添った妻、東軒が病死した。益軒はその直後から健康を害し、四ヶ月後に床につき、再起不能となり、八ヶ月後妻東軒を追った。(一七二四)益軒は仏教の「身心一如」を尊び、当時封建下で君主のためには一人一人の命は鴻毛(こもも)のおおどりの羽・非常に軽いもの(たとえ)の軽きにおけ、の時代に益軒は一人の命は大事である、これが人間社会の基本であると言った。身体を精神と同じレベルに高める。

益軒は「大和本草」を編纂、益軒の勉学は薬物学であり、植物学であり、動物学でもあります。益軒は死の前年、実に八十四歳で書き著した「養生訓」飲食物の食べ方、飲み方、身体のあるいろいろな器官の働き、住まいや衣料のあり方、排泄から入浴の注意、病時の心得、医者を選び方、薬の飲み方、鍼灸の用い方から老人や幼児の養い方に至るまで……身心の安定法を懇切に丁寧の説かれている。ここで有名です。

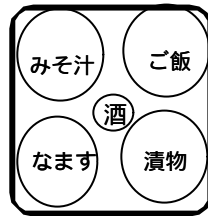
「人身は至りて貴(たつ)とく、おもくして、天下四海にもかへがたき物にあらずや。然るにこれを養ふ術をしらず、欲を恣(ほしいまま)にして身を亡ぼし命うしなふ事、愚かなる至り也。」

『養生訓』より

これを読んで、非常に意味深く感じました。奥深い精神を重んじるあまり、身体(肉体)を哲学的に肉体無し(無)の思想を軽はずみに捉えてしまふ傾向がありますが、当時、身体は精神の奴隷と云う考えが非常に横行していたようです。

「年考いては、わが心の楽しみのみ外、万端、心にさしはさむべからず、時にしたがひ、自ら楽しむべし、自ら楽しむは世俗の楽しみ非(あら)ず。只、心にもとよりある楽しみを楽しみ、胸中に一物、一事のわづらひなく楽しむべし。」 『養生訓』より

心は身の主也。身は心のやっこなり



福岡の貝原家に伝わる元禄の料理の模写



貝原益軒

私の郷里

和歌山地方・家庭裁判所所長 中西 武夫

私と中西所長との縁は昨年の初夏に所長が藤白神社からの徒歩巡拝で熊野古道を散策された時、当寺・福勝寺へ参詣され、お互いに快く会話させて頂き、ご先祖の郷里への思いを通して、日本伝統の神社仏閣を出来る限り徒歩参拝されていることを知る。どんなに多忙であっても人生の大切な時間として一年の計に組み込まれた所長に頭が下がる思いである。

所長のご先祖と同じように、祖母の兄弟に北海道に移住、女満別町の創建に尽くした故保田昌弘を思い出した。今日、家族、平和に営んでいる。(本多)

去る三月六日付けでこちらに参りました。(平成十年)

着任して二、三週間余りですが、朝夕お城を見て通勤し、昼間も窓からお城の桜が次第に華やいでいくのを眺めております。私は北海道の出身で、これまでこのような城下町に生活したこともなかった。どっしりとした歴史の重みを感じ、毎日が新鮮です。

従前は主に東日本を回っており、関西勤務は初めてです。しかし、歴史や美術は大好きで、出張帰りなど、時々奈良、京都に立ち寄り、古社寺や美術館・博物館等を訪ねておりました。高野山には修習生の関係で数度足を運んでいます。以前から全国の国宝を全部訪ねて歩いてみたのの野望を抱いたこともありましたが、すぐにあきらめました。



北海道樺戸郡新十津川町全景
<http://www.dosanko.co.jp/sintotsu/album/index.html>

しかし、退職後にも機会があればいずれ関西に一年ぐらい居住して、旅行者では見ることのできない四季折々の様々な素晴らしいものに接してみたいとの願望をかねて抱いておりました。今回、当地勤務となり、そのチャンスに恵まれたわけ、幸運であったと思っております。できるだけ暇を見つけて管内はもとより各地を回ってみたいと思っております。

郡新十津川町では、お隣の奈良県吉野郡十津川村のことを母村と呼んでいます。

十津川郷は、ご承知のように南北朝や江戸幕末のころなど、歴史のところで登場する村ですが、この村が明治二十一年に大水害に遭い、新天地を求めて集団ではるる北海道に渡り幾多の困難に耐えて開拓して作ったのが新十津川町です。当地に来てから熊野本宮大社の来歴を見ていましたら、明治二十二年に大水害があつて熊野川(十津

川が氾濫し、大齋原にあった神殿が流失してその後現在地に移転再建されたところだったので十津川村の水害も同じ時のものだったのでしょうか。新十津川町は、大雪山を源として石狩湾に流入する石狩川が石狩平野にさしかかってまもなくの中流の右岸に位置し、いまは空知(そらち)地方の米どころになっていました。対岸は滝川市で、裁判所の支部もある町ですがこの辺で十勝の方から流れてきた空知川が石狩川に合流しています。空知川は国木田独歩の「空知川の岸辺」の舞台になったところですが、ちなみに近くの下流「月形町」があり、「ここには明治のころ権吉(集治監)監獄」がありました。権吉(集治監)に限らず当時の北海道の囚人たちは道路つくりなど北海道開拓のためにつらい刑務作業に従事したのです。現在滝川付近を走る国道十一号線は日本一長い直線道路になっていますがその地面にはかつての囚人たちの血と涙がにじんであるのです。北海道の地理歴史は当地の人には余り関心がないかもしれませんが・・・。

十津川、新十津川の人々はいまでも互いに懐かしみ、双方の人が行き来して交流があります。先日、テレビ(司馬遼太郎の)街道をゆく)で十津川の様子を見て「子供のころ夏休みの宿題で町の古老から当時の苦勞話を聞き取りたりしたことや新十津川町にも玉置神社があつて夏の終わりの祭礼の時に門々に獅子舞が来たことなど懐かしく思い出していました。是非とも一度十津川を訪れたいものです。

このように北国育ちですから、スキー、スケートは子供のころからしていました。原っぱで野球もやって遊んでいました。これまで住地は、東京、北海道、福島、沖繩、神奈川(ちなみに家族は藤沢市居住)等を回りましたが、福島沖繩での黒タイ釣り、道東でのサケ釣りは今でも忘れることができません。私は、好奇心

旺盛で、熱中型ですから、いろいろなものに凝りましたが、一番続いているのが囲碁です。また、最近では、アルコールは弱いのにワインに少々凝っています。安くて美味しい新世界のワインを求めて和歌山市内を歩き始めました。以上、皆様方に親しくお付き合ひさせていただきたいとの思いから私に関することを長々と書き綴ってしまいました。よろしくお願ひいたします。

(中西所長の了解を得て、和歌山弁護士会会報より転載) 次回にも掲載が続く

西田幾多郎の「善の研究」
善とは、一言に言えば人格の実現である。
アウグスティヌス(哲学者)

「元来世の中に悪という者は無い。神より造られたる自然は凡て善である。唯本質の欠乏が悪である」
これらの言葉を展開すると、「真の善とは唯一つ。即ち真の自己を知ること」に尽きる。真の自己を知れば、ただに人類一般の善と合するばかりでなく、宇宙本体と融合し神意と冥合する。「真の自己を知る」は、道元禅師の「道をならう」というのは、自己をならうなり(「正法眼蔵・身心脱落」)に通じます。弘法大師は「般若心経秘建」に「仏法はるかにあらず、心中にして即ち近し」といわれています。更に、お大師さまが座右の銘として大日経の「如実知自心」というおことばがあります。同じく興教大師は「仏道遠からず本より自心にあり」と先人から教えられていました。仏は瞑想を行じ、拝む人の心に真相を示現されるのです。

善

岩屋山 福勝寺、所蔵品が公開展示される

「加茂谷の歴史と文化と生活」を探る

- 一、加茂谷のはじまり
- 二、加茂谷と加茂氏
- 三、福勝寺と蓮如
- 四、加茂谷とみかん

場所：
下津町立歴史民族資料館
下津町上六八八
長保寺境内
電話四九一丁四八二六
期間：平成十二年九月末白迄



境内に咲くひまわりの花

編集後記

大学時代の友人に会つたためにワイフと車で亀岡市へ車を走らせる。一人は湯田田回司君、彼が三菱自動車のグループ企業の社長を引退不自由な身体のこともあり旧家の屋敷内にバリヤリーの隠居を建てた。もう一人は皆、博君、彼は大阪工業大学の情報学部の教授お互いに電話やメールで連絡しあっているが、三人が揃ってゆくり快くも楽しい一日を過ごしたのがはじめてである。心は学生時代にタイムスリップ、再会を約束し、帰る。

生長の家の教区の役員をしている友人、小松恒雄氏、小生が事業を挫折、郷里に帰って間もなく母が肝硬変で出来る限り通院と決め療養中、小松先生に折って欲しいと依頼、自毛までお願いし不思議と母は快い眠りにつく。出家後和歌山市内を離れ、時々暮参を兼ねワイフと出かけ、昼弁当持参で立ち寄るのが彼の家長年、ユーマチで療養されている奥さんを何時も温かく介護し、年一回は当寺へお一人が車で参詣されたその彼が心筋梗塞の三日目の入院で元気に退院を、と。その彼が病院の治療ミス(病歴認知)で意識不明、世に多いこんな悲しいことがあつて良いものか昔の医師は問診を重視して治療に当たつた問診で判断する人間、医師の経験に基づき判断が如何に優れていたか、初期の電子秤の開発や医療機器開発に携わつた経験があるが秤には重さという基準がある。医療機器の判定基準は如何に、今日でも開業医で医師の伝統を重んじ、地域住民に喜ばれている医師が当地にいます。

事業不振で倒産、自殺、家族離散等の不幸な話は中小企業の経営者に良くある話、この度は定年後、勤務した会社で給料未払い、おまけに家を担保に勤務先に注ぎ込み、本人は突然死、この世は一体どうなっているのか、神と仏の違い、仏は真実めるがまます語る。

合掌